



科學は果して宗教を葬むる乎

富田海音

一
凡そ人間は人間らしく生きねばならない、近頃一般社會は自然科學の發達によりて現在の宗教に對して假令態度に種々の相違はあるとしても一言にして之れを言へば侮蔑的な眼を以て見張る様になつた事は明かである。而して又之れに對する宗教家其れ自身に於ても自己の内面生活や傳統の宗團の制度を反省して其處に必ずしも彼等の視察の誤りでない事を考へさせらるゝ時、自家の生活形式の上に多くの矛盾を見出した事も疑ひない、そこで互に最も眞面目な最も尊い生活の意義を見出そうと努力する時、そこには互に一方を辯護し他方をこぎ落さうとするのは其の目的でないのは云ふ迄もなく、從つて兩者がかゝる間隔を永く維持すると云ふ事は、人間其のものゝ意義を遂に失却せねばならぬと云ふはめに到達するのも事實である、さればことに能ふ限りの公平な態度から宗教や科學が人間に對して如何なる關係と意義とを有してゐるか、而して人間は如何なる意識を以て之を迎ふべきかを考察して見やう。

二
先づ宗教と云ふ問題から一言せねばならないのであるが、一體宗教其のものを私達から見た場合、現今の多くの宗教家が實際に行つて居る様な偶像崇拜や死人の埋葬のみが宗教其のものであり、又宗教家の爲すべき仕事の凡てあるとは付うしても考へられない、又現に存在する幾多の既成宗教は、矢張り過去に於ける社會現象であり、其の當時の文化的現象であるとするならば、亦今日必ずしもそれが必要であるとは考へら

れない已上、それを以て、宗教の本質的發現の全部であるとは多分誤つた觀察であると言はねばなるまい、勿論斯く言つたからとして私達が前述のものを宗教已外のもの若しくは、迷信的產物であると言ひ切つて仕舞ふのではなく、それ等は唯、宗教の發現的形式の一種であり、又それが具體條件の一部分であつて、宗教をして、宗教たらしむる其の本質は、それ等のもの、外にあるべき事を言ふたのみである。

そこで宗教の本質とは何んであろうか、これに對する見解は必ずしも一樣ではないとしてもそれが最も廣い意味に於ては全宇宙全人生を支配する處のものであつて凡てのもの、根底となり本源となる力であり人生であると言はねばならぬ。彼の波多野精一博士は之れに就て批判哲學の立場から論談した。

宗教の本質は理性の普遍妥當の價値を私達に於て、又私達を通じて其の價値内容を實現する超越的、絶待的、實在の顯現として體顯する事に宗教の本質は存在する。

と云ひ又カントは、

宗教根本的真理の内容は、道德的理性を絶待的實在として認識する事。

であると説いて居る、ごちらにしても人間が生きて行く上に於て如何しても之れによらねばならない。そこに宗教の宗教たる價値があるので、萬古不易の大生命が流れて居るのである。

已上宗教の本質に就いて其の大體を述べた、これから科學に就いて其の要點を言は、科學を分つて、自然科學と、精神科學とに別つ事が出来る、即自然科學は、物理化學、動物學、植物學等の自然現象を物質的に考察するものにして、精神科學とは、心理學、倫理學、法律學等の世界の經驗界を分析的に研究するものである。次に是等の諸科學即ち特殊科學に對して、其普通の原理を探究するのが今の經驗界に對し概念界に當る哲學である、前者の分析的——科學に對して、後者は綜合的科學、前者を形而下學として後者を形而上學と云ふ事が出来る、此等兩科學の職分は現象界の事實を基として其の特徴を發揮し人類生活の上に益々眞善美の花を咲かせ其の生活に愈々幸福を齎らして人生の眞の文化生活を顯現するに至る、此處に宗教と科學の融合一致をも見出す事が出来ると思ふ。

即ち宗教の本質は人間生活の全分換言すれば物我一如の一大生命を與へ其處に安心立命の極致に到達し得るのである、宗教は前述せる如く人生生活の全分で且つ根源である、科學は同じく人間生活の産物ではあるが部分的である、故に根底に於ては此の兩者は密接不離の關係にあることは勿論である、特殊科學は哲學に依つて價值づけられ而して宗教に依りて人間の所有として眞の生命を附與されて生きて働くに至る、唯一應之れを研究する上に於て別つて見るのであつて科學と哲學は智的研究、宗教は情的信仰を以て對するのみである、如何に諸の科學が學理的進歩をしても人類が最終の欲求たるべき、安心立命が得られなかつたら其の文明も何の効果もなく宛も砂上の樓閣に了つて仕舞ふ。故に兩者は相俟つて文化生活は營まれねばならぬ、科學に依つて文化に華咲き宗教に依りてそれ等一切を綜合して眞に人間の物として前に満足を得るのである、兩者の關係は固より人間が眞に生きんとする要求より產出されたるものなる已上、そこに必然的關係の存するは言を俟たない。

四

以上科學と宗教とは密接不離の關係である事を述べた、現代科學の文明は燦然たる花を咲き競ふて居る、然るに我か宗教界は、依然として因襲的形式のみに囚はれて居るものがある、假令ば佛典の文上のみに趨つて御守、御符、咒文又は護摩等の如く、尤も此等は教理の産なりとして大體に於て甚だ恠まざるを得ない、是等只人間としての所謂文化生活に價值あるべき最終理想に惹き入るべき一段として一時は許すも是れを以て眞に宗教の本質なりとして布教弘宣する様では、極力反對せねばならぬ、現今の民衆は、文化發展に伴つて是等の迷信的、盲目的、信仰打破の問題も、有識階級には唱導されつゝある、將來人類は、益々科學的になればなるほど、因襲宗教は無智蒙昧者のみの玩具として取り残されて、何等の權能を維持する事能はざるに至るは當然である。

苟も現代人を指導するには頑強なる形式的ではならぬ、根底に横はる眞意義の發露と其の力に依りて指導

することを欲するのである。即ち人間生活上眞に缺くべからざる價值あるものでなければならぬ、現代は通觀して、ある今過渡期、此の期を逸せず從來の因襲的頑強なる形式に囚はれずに改善する必要があると思ふ。

吾祖は既に業に此の合理的宗教を題目の七字に結んだ、之れ永恒不易なる真理であつて、人類普遍的に歸依すべき根本原理にして智情意三方面に何等の撞着を醸すことなき、一大宗教として世界的に紹介する價値を有して居りながら餘りに目醒めないことを慨嘆するのである。已上



文 化 說

靜 溟 生

夫文化者之生、俟於人、人也者文化之主體矣、今觀世間、崇其力用、尊其能率、將迎之者、是自然科學也、然而其業績也偉大、其應用也廣汎、眞足使人驚心愕目、世謂之文明、以爲黎民由是厚生、國家由是富裕、雖然、今人益苦其矛盾、欲解愈煩悶、是果何乎、曰據偏重科學、故宜使驅者、反及爲使驅、是其弊也、夫爲造由目的者、所壞由目的、但爲不然人生、技工之產物者、人之所有、而莫爲是所役、爲是所役、則失價值、失其價值、則不能爲文化之主體矣

